

本願寺 御歴代門主シリーズ

その十八

本願寺第十九代宗主

本如(ほんによ)上人(一七七八年～一八二六年)

本如上人は、一七七八(安永七)年に第十八代文如(もんによ)上人の三子息として誕生されました。

一七九九(寛政十一)年に文如上人の往生の後を承け、二十二歳で本願寺第十九代の法灯を継職されました。

本如上人の最大の功績は、前々代の法如上人の時から論争となっていた「三業惑乱(さんごわくらん)」という安心(あんじん)問題(教義論争)の裁断でありました。

「三業惑乱」は、教義に関する学問の最高位にあった智洞(ちどう)師がお念仏のみ教えは「たすけたまえと意に思い、口に出し、身に現すことである」と主張(新義派)したことにはじまり、それに対し「身(しん)、口(く)、意(い)の三つの行為で念仏せねばならぬ」というのは自力的な要素をもつものである」との批判(古義派)が起りました。

この問題は門信徒にも広く浸透している『領解文(りょうげもん)』の解釈にも関わるものでありましたので、この論争は学匠のみならず広く僧俗を巻き込む教団全体の騒動となりました。

そして、ついに幕府寺社奉行が両派の代表を呼び出して事情聴取を行い、その結果一八〇六(文化三)年、幕府は「新義派を不正義・古義派を正義」とする裁決を出し、それぞれに処罰を与えるとともに、騒動の総責任は本願寺にあるということで、本願寺に百日間の閉門を命じました。



本願寺第十九代宗主 本如(ほんによ)上人

当時二十九歳であった本如上人は、門主の最終判断として絶対他力の立場を『御裁断御書(ごさいだんのごしよ)』として全門末に通達され、この御書がその後の教団の教学問題の基準となりました。

なお、幕府の詮議の間、築地御坊(別院)は教団の中心となって働き、古義派の代表となった安芸国(広島)の大瀧(たいてい)師は裁判中に築地御坊で病死され、墓碑が境内に建立されています。

また本如上人は祖師(親鸞聖人)五百五十回大遠忌法要を勤修され、それに先立ち影堂の大修復や、地方別院の巡回、六十二通におよぶ各種(ご)消息(教示のお手紙)の下付などに尽力なされました。

また一方、芸術面にも御造詣が深く、絵画に巧みで雅号を碧山(へきざん)と号し、和歌や雅楽、茶道も嗜まりました。

本如上人は宗主として二十七年間在職されましたが、一八二六(文政九)年十二月十二日(旧暦)四十九歳で浄土へ往生されました。

※参考文献 福岡光超著

「親鸞聖人と本願寺の歩み」(永田文昌堂)

今後の法要スケジュール

「夏の子ども会」(善教寺本堂)

八月 四日(月) 午前十時半～午後三時
講師 根来智師(呉市阿賀北宝徳寺)

※仏教婦人会主催行事

仏さまの話を聞き、本堂でゲームをします。昼食は、仏教婦人会役員さん手作りカレーを頂きます。

「孟蘭盆会納骨法要」(善教寺本堂)

八月 八日(金) 昼席：午後一時半～
九日(土) 朝席：午前十時～
昼席：午後一時半～

講師 朝枝曉範師(北広島町中原本立寺)
*送迎マイクバスを運行します。

「宗祖聖人月忌・

門信徒祥月命日法要」(善教寺本堂)

八月 十六日(土) 午後一時半～
*毎月十六日に本堂において勤めております。

「柏原孟蘭盆会法要」(柏原説教堂)

八月 十九日(火) 昼席・夕席
二十日(水) 朝席・昼席

講師 広幡康祐師(安浦町信楽寺)

「秋季彼岸会」(善教寺本堂)

九月 二十日(土) 朝席：午前十時～
昼席：午後一時半～

講師 長尾量之師(東広島市黒瀬町浄願寺)
*送迎マイクバスを運行します。

ご縁に感謝

善教寺ホームページ『縁』 <http://www.otera.or.jp/>

メール zenkyo@otera.or.jp